

**ANALYSER AF MODERNE LYRIK 2001** 

### 目次

Bukdahl, Lars	Maiko Yamauchi
FILM	1
Bødker, Cecil	Kyoko Teshima
Afspænding	3
Ditlevsen, Tove	· Kaori Nagano
De evige tre	5
Selvportræt 5	
Gelsted, Otto	Yuko Ichihara
Mennesket	13
Højholt, Per	Atsushi Fukuda
Korrespondance	16
Nielsen, Morten	Yuki Fujimura
Døden	19
Nordbrandt, Henrik	Masumi Daito
Landgang	22

### Lars Bukdahl

### FILM

På disse kornede sort-hvide billeder, der bevæger sig lydløst som en tyv over loftet i aften, ser jeg mig selv, som jeg var, da jeg altid var en anden og helst den, der var nærmest. I de evigt halsende, hastende, hostende gader. Se mig forvandles fra en sky til en brandmand og tilbage igen. Alskens ensomme blinker forbi. Bag et stormagasins store blanke ruder står en telefon, jeg forestiller mig, at den er rød, og at den ringer. Højt som et barn.

### フィルム

今夜, 天井裏で 泥棒のように音もたてずに 動いている, これらの粒子状の モノクロの画面に, 私は私自身を見る, いつも別人であり, そしてその最も近くに いてほしいと 思っていた私を. 永遠にうなり、 せわしなく, 咳き込んでいる 通りで. 雲から消防士に変えられ, また雲へと変わってゆく 私を見てくれ. いかなる孤独も 瞬いては過ぎ去ってゆく. あるデパートの, 大きくて ぴかぴか輝く窓ガラスの後ろに 一台の電話があり, 私は想像する, 電話が赤く, そのベルが鳴るのを. 子供のように甲髙く.

### Lars Bukdahl

1968 年リスコウに生まれる. 国民学校(日本の小・中学校にあたる)を卒業後、オーフス大聖堂高等学校に進学. その後オーフス大学、コペンハーゲン大学で文学を学び、1994 年に小説『エスカー・エスカー』で文学界において一躍有名になる. 1990 年に結婚、現在 2 児の父親である. 1988 年から 1996 年までキリスト教系新聞で文芸評論を連載、1996 年からは新聞の週末版でコラムを担当する. 大学や作家養成スクールなどで文学におけるあらゆる分野(記事やエッセイなど)の講義を担当している.

また彼は1993年から Litterær Hypnose の名で、高校時代からの友人 Jens Blendstrup と ともに舞台の企画・演出も手がけている.

舞台と作家養成スクールの重役会メンバーでもある彼は、相対論者としての指導的役割も果たしている、現在も活躍中.

### 解釈

白と黒のドットで構成され、次々に場面の変化するサイレント映画の画面に見出された「私」、雲から消防士へ、そしてまた雲への変身を遂げる「私」、この詩において「私」(もしくは作者自身)は非常に不確かな存在である。「私」自身自らの不安定な存在を感じ、それを無機質なもの、もしくは捉えどころのない自分以外のものになぞらえることで客観的な立場から自分の存在を捉えようとしている。

そしてサイレント映画の「静寂」と通りや電話の「喧燥」、サイレント映画の「モノクロ」と電話の「赤さ」。これらの音と色の対照は詩全体にメリハリをつけること以外にも、「無」から「有」への変化を象徴し、また「有」の象徴によってしっかりと確立された自我を表現するという役割を果たしている。

しかし「私」が確固たる自我を求めているかというと、そうではないと思う. というのも、「喧燥」と「赤さ」といった「有」の状態を表す詩の中の表現からは、いぶかしさや(電話という)無機質さが主に感じられるためである. 不確かな存在というのは、言いかえれば変化していく存在と捉えることができる. 「私」は自らを客観的に捉えた上で自身の変わり行く存在を実感し、それをありのまま受け入れようとしているのだと思う.

また辿もなく改行も不規則なこの詩の形態は、あらゆるものにおける変化の、連綿と続くさまを象徴しているようにさえ見て取ることができる.

### Cecil Bødker

### Afspænding

Ligge på sin flade ryg
og lytte,
synke ned til græssets rod
og ormene, og føle tørven
halvvejs opad siden.
Gå i leje
låne et cikadelår
og spille fint
på egerne i solens hjul.

Ligge på sin flade ryg
og lade joeden ta imod sig,
føle klokkeblomster spire
mellem knoglerne
og mærke græsset lukke sig
igen.
Koens delte klove glemmer
at den tue der
var mig.

Lade regnvand pusle
med min hovedskal
og sive ned i jorden
med min hjerne,
føle knoglerne forskydes,
skride,
høre tuen synke.
Ingen aner hvilken vægtig træthed
der fandt hvile her.

### 休息

仰向けに横たわり 聞く, 草の根や 虫のところまで沈んで 草地が体の半分まであるのを感じる. 寝床へ行って せみの腿節を借り 太陽の車輪の軸を うまく鳴らす.

仰向けに横たわり、 大地に身を任せる、 骨の隙間から ツリガネ草が成長するのを感じ、 また草が閉じるのを 感じる. 牛の割れたひづめは その塚が私であることを 忘れている.

雨水が私の頭と共に 音をたて 私の脳と共に 土の中に染み渡らせる、 骨がはずれ、 滑るのを感じ、 塚が沈んでいくのを聞く、 誰も想像だにしないだろう、 どの重たい疲れというものが ここに横たわっているかを、

### Cecil Bødker

彼女は女性小説家であり児童文学者である.彼女は時空を超えた人間一般の問題をギリシャ神話と旧約聖書の世界から題材をとって詩作していた.彼女が散文作家として躍進したのは短編小説「目」(1961)においてである.

Cecil Bødker はモダニズムの手法をとっていたが 1970 年代に入ると文体がリアリスティックになった. それは「沈黙の話」(1971)や「塩売り女の家」(1972)などに明瞭である. また, 同時代作家の政治化傾向に背を向けるような作品も書いている.

80 年代に入ってからは現代社会で女の生きる道を探った作品を発表した。彼女はウーマンリブとはかけ離れた地点から、女性が孤立から脱するには自己をよりよく理解することが肝要、と主張する.

彼女の全作品のおよそ半分を占めるのは児童文学であり、特に近年多くの作品を書いている.「シーラスと黒い馬」(1967)は児童文学の傑作であり、76年度国際アンデルセン賞を受賞した. その後も多くのシリーズを出し、日本でも訳され現在まで親しまれている.

### 解釈

この詩は想像力を掻きたてる.

「私」は広大な草原に身を任せ、大地の動くさまやそこで息づいている大自然を全身で感じている。人間の感覚は次第に自然と混ざりあい、一体化していく。その中で膨らんでゆく想像の世界は壮大で、とどまるところを知らない。生命力にあふれたツリガネ草は「私」の体を突き破って成長する。骨は定まった枠から外れてゆき、そして降り注ぐ雨水は「私」の脳と共に大地に染み出ていく。

目を閉じるとあたかも自分の体が大地に開いていくようである.

「私」はそれほどまでに静かに横たわっており、一見それは人間という感覚を解き放ってしまったかのように見える。しかしそうではない。これは自然の生命力をたたえた詩ではないであろう。「私」は詩の最後で感じている。己の重たい疲れが、塚(「私」)が沈んでいくと感じるほどに確かに存在していることを、いやあるいは逆に、ぬぐえない重たさを振り払うための Afspænding(休息)、ぬぐえない重たさを振り払うために描く壮大な大地への幻想、と言った方がよいかもしれない、いずれにせよ、最後に「私」は気づくに違いない、重たい疲れというものが、存在こそするが、大自然の中でどれだけ(誰もが想像だにしないほど)ちっぽけなものであるかということを、

### Tove Ditlevsen

### De evige tre

Der er to Mænd i Verden, der bestandig krydser min Vej, den ene er ham jag elsker, den anden elsker mig.

Den ene er i en natlig Drøm,
der bor i mit mørke Sind,
den anden staar ved mit Hjertes Dør,
jag lukker ham aldrig ind.

Den ene gav mig et vaarligt Pust af lykke der snart for hen, den anden gav mig sit hele Liv og fik aldrig en Time igen.

Den ene bruser i Blodets Sang, hvor Elskov er ren og fri, den anden er Et med den triste Dag, som Drømmene drukner i.

Hver Kvinde Staar mellen disse to,
forelsket og elsket og ren—
een Gang hvert hundrede Aaar kan det ske
de smelter sammen til een.

### 永遠の3人

この世界には2人の男がいる,彼らは 絶えず私の道を横切る。 一方は私が愛する人で, もう一方は私を愛する人.

一方は夜の夢の中にいて, 私の暗い心の中に住んでいる, もう一方は私の心の扉のところにたたずんでいて, 私は絶対に彼を中には入れない.

一方はすぐ向こうに行ってしまう幸福の 春のひと吹きを私に与えてくれた, もう一方は人生すべてを私に与えて そして二度と,一時たりとも,何も得ることはない.

> 一方は情熱の歌を大声で歌う, 愛は清く,自由なのだと, もう一方は夢もおぼれてしまうような, 悲しい日を担った人生.

すべての女性はこれら2人の男の間に立つ, 恋に落ち,愛し合う,純粋でいる一 百年ごとに一回だけ 彼らは1つに容けていくということが起きたかもしれない.

### Tove Ditrevsen (1917-1976)

自分自身を素材にして、詩や、小説を書いた、国民的女性作家. コペンハーゲンの労働者の家庭に生まれ、22歳で詩人としてデビューする. その後 4回も結婚するが、幸福な結婚生活は送れなかった. 私生活と、作家生活の葛藤の中で、アルコール中毒、麻薬中毒に陥り、自殺して一生を終える.

その間,愛のはかなさや,女の孤独をテーマにした詩集,『乙女心』Pigesind (1939) や『女心』Kvindesind (55),『秘密の窓』Den hemmelige rude (61),『丸い部屋』Det runde værelse (73) などを書いている.

小説では、『幼き日の小道』Barndomenns Gade (43) など、自らの子供時代を振り返って、主人公の不安などを、自然主義的に描写する、自伝的作品がある。回想記3部作『少女時代』Barndom (67)『娘時代』Ungdom (67)『結婚』Gift (71) でも、自己の体験を赤裸々に語り、愛に飢えた、悲しい生活に埋もれた女性を描いている。

作品の中に自分自身を強く反映させ、私的で、感情的な描写を加えた文章が、多くの 読者に共感を与えた。

### 解釈

芸術的才能があり、容姿端麗だった彼女にとっての現実である. 愛の矢印が悲しくもすれ違う様子が、はっきりと描かれている. ここでは夢 (Drøm) という言葉が、繰り返し出てくるが、清く (ren) 自由である (fri) と彼女がイメージする愛を、お互いに与え合うことなど、彼女の現実においては、ほとんど夢のようなものだった. けれども最後の 2 行にあるように、百年ごとに一度だけ、お互いに愛を確かめ合える相手が現れる可能性を付け加え、それを夢見たのだろう.

文体については、すべてが 4 行からなる、5 つの連に、きれいにまとまっている. さらに、ほとんどが、一行ごとに韻を踏んでおり、音の流れがとても美しく響く詩である.

これは,彼女が 25 歳の時に**啓いた詩である**. 1942 年は,彼女にとって大変な年で, 最初の夫と離婚し,2番目の夫と結婚した年である.

### Tove Ditlevsen

### Selvportræt 5

Jag stod engang
og ventede
foran BTCentralen
på en der ikke kom
Jag elskede ham
Min ungdom
faldt af mig i
stor flager
Jag lod som om
jag ivrigt
læste lysavisen
og ramtes personligt
af budskabet om
Gustaf Munch Petersens død
i den spanske borgerkrig.

Hvorfor
kom han ikke?
Jag skulle ikke
ha nægtet ham
at ta min besværlige mødom.

Min veninde sagde man kunne se på pigers øjne om de havde den eller ikke. Der stod en
gammel dame
ved siden af mig
under
en opslået paraply.
Hunden på hendes hals
lignede en kalkuns.
Jag ønskede jag
var hende
fordi hun
var nærmere døden.

Hele mit liv vil jag huske
hendes ansigt
hele mit liv vil jag huske
Gustaf Munch Petersens
navn
og misunder ham hans skæbne.

I boghandlervinduet stod "Og nu venter vi paa Skib" af Marcus Lauesen.

Den fik jag aldrig læst
jag tænker med modvilje
på den
hvergang jag går forbi
BTCentralen
hvor der står
en lårkort pige
og lader som om
hun er stærkt
interessert
i lysavisens sitrende
ord om Vietnam
Biafra og oprøret mod

Professorvældet.

Hun ser et øjeblik

på mig

og misunder mig

at jag er nærmere døden .

Hun vil aldrig glemme mit ansigt.

### 自画像5

私はかつて BT-Centralenの前で やっては来ない人を待っていた。 私は彼を愛していた。 私の青春は 大きなかけらを残した。 私はあたかも 熱心に 電光掲示板を読む振りをした。

スペイン内乱で
Gustaf Munch-Petersenが死んだ
という知らせに
衝撃を受けた振りをした.

どうして彼は来なかったの? 私は否定すべきではなかったのに 彼が私の 重苦しい処女性を奪うことを.

> 私の友遊は営った 人は少女の目を見れば, その子が処女性を

持っているかどうか分かると.

私の隣に 一人の年老いた夫人が 開いた傘の下で 立っていた.

彼女の首の皮膚は 七面鳥の皮のようだった。 私が彼女だったなら というのは 彼女はほとんど死んでいるから。

私のすべての人生を思い出す 彼女の顔に 私のすべての人生を思い出す Gustaf Munch-Petersen の名に そして彼の運命をうらやむ.

本屋のウィンドーに Marcus Lauesen の "Og nu venter vi paa Skib" が並んだ.

それを私は一度も読んだ事がない
私はそれが嫌いだった
私はBTーCentraren を通り過ぎる度
そこには
腿丈のスカートの少女が立っていて
あたかも彼女は
ベトナムについての言葉が流れる
電光掲示板に興味がある振りをする
Biafra と教授の権限に対して氾濫を起こすことについて興味がある振りをする.

彼女はちょっと私を見て 私がほとんど死んでいることをうらやむ.

### 彼女は私の顔を絶対に忘れないだろう.

### 解釈

形式にとらわれない、自由な文体で描かれている.

前半の部分で、かつての青春時代の自分を回想し、後半の部分で現在を描いている。 青春時代の自分は、その時代の英雄的存在であった Gustaf Munch—Petersen が戦死 したという知らせが電光掲示板に流れていても、やっては来ない愛する人の事や、自分 自身の処女性のことなど、身近な自分自身の生活のことばかりで頭がいっぱいだった。 それはすぐ隣にいたしわしわの、ほとんど死んでいる年老いた婦人と、Gustaf Munch —Petersen の運命を同じようにうらやんだ、というところでも分かる。当時の自分を 振り返る上で、その二つは同じくらいの重要度だったのだ。

後半では、当時の自分自身を思わせる存在として、同じく BT-Centlaren にたたずむ少女を描き、自分をかつてのほとんど死んでいる年老いた婦人と重ねている。ここでも、その時代の代名詞ともいえるものが出てくる。Marcus Lauesenの Og nu venter paa skib というのは、ある一族の没落を描いた作品で、当時のベストセラーだった。ベトナムや、Biafra(ナイジェリアの地名)などは、当時の重大事件に関わる地名である。学生運動についての描写もある。しかしここでも、その重大なニュースより、その少女と年老いた自分は、お互いの様子にばかり気を取られている。

そういう自分に後ろめたさを感じながらも、一般人としての正直な気持ちが表現されている.

### Otto Gelsted

### Mennesket

- Jordens ild under mig, over mit hoved et univers af tilintetgørende kulde. Til alle sider de gronne lande, det blå hav, horisontens skønne, vandrende ring.
- På en kugleskal i rummet balancerer jeg mellem driftens altopslugende vanvid og tankens forstenende kulde.
- Mellem afgrund og afgrund bygger jeg livet op, toner og smag, skibe og byer, farvens vidunder og digtet, der spejler alverden.

### 人間

- 私の足元には 地球の炎 頭上には 痛烈な寒さから成る 宇宙. 四方八方に 緑の大地 青い海 地平線の 美しい 動き回る輪.
- 宇宙空間に浮かぶ球形の殻の上で 私は 均衡を保つ 本能の 吸い込むような狂気と 理性の凍りついたような冷たさ との 間で.
- 絶壁と絶壁の狭間で 私は 生命を 興す 音の調べと 味わい 舟と街 色彩の驚異と 世界中を映し出す 詩とを.

### Otto Gelsted

両大戦間の時代に評論家、批評家として活躍、外来のモダニズムと国内のプチブルジョワジーとの間にデンマークの進むべき道を求め、彼自身の言葉を借りると、「革命的ヒューマニズム」と称された主義を唱えた、それは非常に局地的な急進主義であった。彼は外部からの文学的影響は感じられない保守的作家であり、同時に伝統主義者であった。彼に伝統意識を根づかせた要因としては、喧騒、センセーション、そして見解と態度の混乱を持った現代の都会生活からの影響が大きい、このように近代性に脅かされる中で、彼は合理主義と自然に救いを求めた。彼の創作する詩は、こうした彼の世界観がその集大成と言えるほどに色濃く描き込まれている。主な作品としては、詩集『処女グロリアント』(1923)と『アストリズへの旅』(1927)がある。

### 解釈

「暖」と「寒」,この対極する2つの要素がこの詩全体を彩る.地球とその表面に広がる自然の暖かな色彩や営み.果てのない,冷酷なほどの暗闇から成る冷えきった宇宙空間.吸い込まれるかのように執拗に迫りくる,自由を許さないその様を「狂気」という擬人化でもって表された欲望の熱.冷静の中でのみ現れ,自己の中に確かに,しかし静かに存在する冷然たる理性.

第1連には、自らの立つ位置から上方と下方それぞれに2つ世界の存在を感じる作者の姿と、青と緑と、美しく輝く円形、という見え方がするまで距離をおき地球をとらえた作者の視点とが共存する。第2連では、人間の精神の根源的な要素といえる本能と理性、このはざまで揺れ動き、必死でバランスを保とうとする作者の心のあり様が描かれる。そしてその精神的不安定さは「宇宙空間に浮かぶ球形の殻の上」という物理的に不安定な描写が付け加わることによって強調されている。第3連はこの詩における'結'にあたる。人をよせつけない冷酷たる宇宙と暖かな母なる大地の間に立っていると自分を感じたとき、あるいは自己の内部での葛藤など、相反する要素の対立、極限状態でこそ生命は奮い立ち、五感は刺激されると、文化、絵画をはじめとする芸術、そして詩を紡ぎ出す感受性はそういった狭間でこそ沸き出てくると。ここでは「世界中を映し出す詩」を生み出している作者の、詩人としての自負の念も窺い知ることができよう。

ゲルステズの書く詩は、不在と存在、思考と感情、文化と自然の対立が短い記述、すなわち明確な生き生きとした描写の中に表現された時、最高のものとなった。そういった意味で、この『Mennesket』は彼の詩における主題がきわめて顕著に表れた作品であ

ると言える. 自然を逃避と救済の場所として見なす傾向にあった彼は、この作品の中にもやはり彼の目に映る自然像を、独自の短い記述でもって描いた. そしてそれは、'自然'と聞いて我々が想像する、緑があふれ花々が咲き、山がそびえ小川がせせらぎ、といった憩いの場的な楽園ではなく、時に人間の小ささ、無力さを知らしめるかのように存在する壮大なる大自然でさえもなく、それは、底無しの宇宙、そこに浮かぶ地球である. 都会の息の詰まるような喧騒の中に立ちつつ、彼の心はその過大な程のスケールを持つ自然物に救いを求めていた. その無限性、神秘性に魅了され、崇拝していたのではないだろうか.

この詩は、『Mennesket (人間)』というタイトルを持ちながら、終始一貫してゲルステズ自身の一人称で語られる。この不一致を承知で、作者はいかなる意図をこめてこのタイトルを付けたのかという疑問は無視できない。作品は確かに自己の体感に基づいて詩作されている。しかしその体感はきわめて人間性を帯びたものであり、この万人に通ずる普遍性を『Mennesket (人間)』によって示したのだろう。そして、作者自身の、自分もまた一人の人間として人間らしく存在できているという実感が、この詩には張っている。

Per Højholt

Korrespondance

Flintstrøede skrænter tilgroet med vilde æbler.

I en sø, fem svaner under sprogets overflade gentager en boble sig selv.

Teglværksbanen, Hemingway
på disse kanter, udlader sig
kort, præcist mod
brakvandsbrøndens punktum:
dybt rungende dafnievand.

Der udgår snart et stort brev herfra, fra det inderste af fjorden. Et myldr af vinger på bunden.

### 文通

石が撒かれた 坂道 野生のリンゴの木が 一面に生い茂っている

> 湖に 5羽の白鳥 言葉を越えて 1つの泡が 繰り返し出ている

この辺りで レンガ工場への道 ヘミングウェイ 短く 正確に 停泊する

### 塩水の井戸の ピリオドの方へ 深く 群れを成している ミジンコ

もうすぐ 1 通の大きな手紙が送られる ここから 入り江の一番奥から 底に たくさんの羽

### Per Højholt

1960年代に現れた、デンマーク文学の体系的創作を代表する作家の一人. 1963年、詩集『詩人の首』で世に知られるようになる. その当時から詩の内容は相当な評価を得ている. その後の詩集『わが手66』(1966)と『ターボ』(1968)では、テキストがもはや意味を持つのではなく、芸術的な側面を見せている状態が追求されている. 小説『6512』(1969)以降、彼の作品はさらに芸術性を増していく. 1974年発表の絵本『ボリューム』では、1ページ1ページが読者を魅了するショーのようであり、彼はここで言語芸術と視覚芸術の境界を越えたといえる.

今回取り上げた"Korrespondance"は1964年に発表されている.

### 解釈

ユトランド半島の入り江,湖の白鳥,群れを成しているミジンコなど,ありふれた風景の描き出す表現.その中に,体系的創作の特徴である「素材としての言葉」が巧みに織り交ぜられている作品である.

文通によって、私たちは会ったことのない人間と心の交流を図る。第2連に出てくる en boble (泡) は、そのやり取りを象徴している。言葉のやり取りのさらに底辺にある 「相手とのつながり」が、1 つの泡の繰り返しで表現されている。また第4連の et myldr af vinger (たくさんの羽) は、手紙を書くための羽ペンを表すと同時に、相手に伝えたいたくさんの思いを表現している。

文通は電話と違い、距離や時間を要する。この点も、詩の中でうまく扱われている。まず距離感であるが、これは第3連目の teglværksvanen(レンガ工場への道)と、brakvandsbrønden(塩水の井戸、つまり海から水を引いた井戸)という言葉に込められている。また mod punktum(ピリオドの方へ)で、文章の一文一文を丁寧にしたためている状況を思い浮かべることができる。

時間に関しては、詩全体を見た時、第1連が過去、第2、3連が現在、第4連が未来を

それぞれ表現していることに気づく. 第1連の flintstrøede (石が撒かれた) であるが, flint とは火打石に使われる昔の石を指している. また野生のリンゴの木が生い茂っている描写が, 原始的な風景を思い起こさせる. 第2, 3連では, 手紙の送り主が, 手紙を書きながら窓から見える風景が窺える. そして第4連は, 今から手紙を出す, 近い未来の内容になっている. 詩を読み進めていくと同時に, そこに時間の流れを感じさせる表現が印象深い作品だ.

### Morten Nielsen

### Døden

Døden, den har jeg truffet da jeg var Dreng.

Men kun som en Stilhed hos nogen som jeg holdt af.

Aldrig som noget omkring mig,en kulde, en Skygge,

Ingenkan nævne ved Navn eller vige fra.

Aldrig som kulde ved en fremmed Ting.

Som Dyb paa Dyb I stivende Muskelbaand.

Som om jeg faldt og faldt I en rumløs kulde

ved at holde en fremmed kolde haand I min haand.

Nu kender jeg den igen,her og allevegne.

Den staar I det tavse lys over Skovennes Bund.

Den gaar som en svimjende Fjernhed i Sommerhimlen

og ligger som Klager over den sovende Mund.

Den venter, for altid lidt ved Siden af tingen en skygge, usynlig, langs Aarer og Sten og Træer.

Den gør det mere rigt med de nye Sekunder og mere ondt. Og den er mig altid nær.

Men vi føler ingen Samtaler med hinanden, hverken ved Dagslys eller naar Stjernerne gaar i Flok. Vi ved det kun begge to, at den snden er der. Mere er ikke nødvendigt. Vi mødes nok.

### 死

死, それは私が子供の頃に出会ったことがある しかし、ただ私の好きだった何かのところにある静けさのようなものだ 私をとり巻いている影や、冷たさのようなものではないし、 名前を呼ぶことのできるようなものではないし、離れていくことの出来るものではない

> 見知らぬものもつ冷たさのようなものではないし、 硬くなった筋肉の束の深い深いところにあるものでもない 見知らぬ冷たい手をにぎりながら 冷たい果てしない部屋に落ちていくような冷たさでもない

今,私は死に出会う,ここでも,どこででも 死は森の底の沈黙した光の中にいる 死は夏の空の中で目もくらむほど遠く離れたもののようにいくものであり 不平を言うまどろんだ口に横たわっているようだ

> 死は物事のすぐそばでほんの少ししか待たない 影,見えないもの,年月,石,木々の側にある 死は刻々と豊かになるものであり 傷つけることもある.それはいつも私の身近にいる

しかし私達がお互いに会話を交わしていると感じたことはない 日光の中でも、星が群れで動く時でも 私達二人だけは知っている、お互いに隣り合っていることを それ以上は必要がない、私達は出会うはずだから

### Morten Nielsen

叙情詩人.「武器なき戦士たち」(1943)に収録. モーテン・ニールセンは第2次世界大戦中に多くの詩作をしたが,時代は彼の詩の背景ではあっても,モチーフではなかった. 愛,自然,同世代人を題材にしたが,占領時代の死の意識の視点からあらゆることが経験された.「死」は彼の詩において重要なキーワードである.

ドイツ占領下のデンマークにおいてレジスタンス運動に参加し、22歳の若さで、謎の 死を遂げている。

### 解釈.

死,それは生あるものみなの抱えた不可避の運命である.あるものは自らの死と出会い、またあるものは身内や、友人や、または見知らぬ人の死と出会う.死は常に誰かのもとの転がっていて、時には当然人を傷つけ、時には成長させることもある.死は必ずしもただ冷たいものとして残されていくのではなく、記憶として残される.

それがある日,新しい死と出会った瞬間,死がここにも,どこにでもあるものだと認識する.そして死が透明で,影のようで,月日のようなもので,会話を交わすことは出来ないが自分の側にあることを知る.

なぜ、ここまで死を人は抱えているのだろうか。それは生まれたときに、死に向かって、あるいは死と共に進んでいかなければならないからである。もし命が永遠であれば、死を思うことはないだろう。死があるからこそ、自分と死は隣り合っていることを思う、だからといって、無理に死を必要以上に思うことはないのだ、なぜならいつか、自らの最後の時に、死と出会うことがわかっているからだ。それを嫌ったり、名前を呼び合ったりすることない。

死は否定的なものではなく, あくまで肯定的に描かれている.

### Henrik Nordbrandt

### Landgang

Efter så mange forgæves rejser, efter så mange flugtforsøg
uden at vide præcis, hvad det var jeg ledte efter
uden overbevisning, uden søkort og båret frem af synkende skibe
efter at have beskrevet tingene, jeg så, igen og igen
så mange gange, at de ophørte med at existere som andet end ord
—efter så mange tomme fraser og så mange unødvendige løgne
oplever jeg pludselig igen hvert ord som en kærlighedserklæring.

Og jeg tilbeder hvert ord, fordi det tvinger mig til at synge
på samme måde som vi besynger stormene på havet
fordi de tvinger os til at bøje os for dem og søge tilflugt
i så mange ukendte navne, på så mange fortryllende øer.

Jeg tilbeder byerne, hvor vi blev mishandlet, for deres navne
de sorte oliven, og brødet, og ordet for vin på syv sprog.

Jeg tilbeder landene, vi aldrig så, fordi de tvang os til at opfinde dem.

Jeg tilbeder den brændende jord, fordi den tvinger mig til at danse og mine opbrugte masker, fordi de tvinger mig til at le

Jeg tilbeder min ligegyldige død, fordi den tvinger mig til at leve.

Mithimna, Lesvos, Juli 1973

### 上陸

あまりにも多くの無駄な旅をした後 あまりにも何度も逃亡を試みた後 自分が何を探し求めているのか、正確に知ることなく、 確信無しに、海図無しに 沈みかけの船に運ばれ 自分の見た物事を、含薬以外の何も存在しなくなるほど何度も 一あまりにも多くの空っぽなフレーズを、あまりにも多くの不必要な嘘を 繰り返し繰り返し描いた後 突然私は再び言葉のそれぞれがある愛の宣言だと感じる

そして私は言葉それぞれを崇拝する。なぜならそれは私に歌わせるから、 私達が海で嵐をたたえるのと同じやり方で.

なぜならそれは私達に頭を下げさせ,

そしてあまりにも多くの知らない名前に、あまりにも多くの 魔法のかかったような島々に逃げ込ませるから.

私は、私達が冷遇された町々を、それらの名前ゆえに崇拝する. その黒いオリーブを、そしてパンを

それからその言葉を7カ国語でのワインゆえに、崇拝する. 私は私達が見ることのなかった土地を崇拝する, なぜならそれらは私達にその土地を発見させたから.

私はその燃える大地を崇拝する、なぜならそれは私を踊らせるから、 そして私の使い尽くされた仮面を崇拝する、 なぜならそれらは私を笑うようにさせるから、 私は私の無関心な死を崇拝する、なぜならそれは私を生かすから、

### Henrik Nordbrandt (1945~)

1966年 "Digte" (『詩集』) でデビューする. 時代の流れの外にあって極度に感覚的な詩的言語を駆使した抒情詩を勘きつづける. デビュー作以来, 不在と疎外がテーマとなっており, 言葉から意味を奪うことで空虚, 「無」を出現させようとする. 旅を重ね, ギリシャ, トルコ, イタリア, スペイン各地に住まい, 特にギリシャの色, 香, 音を詩魂の故郷として五感を解放し, 暗喩を多用した感情表現を行った. また, トルコの民話を再創造("Historier om Hodja" 1973)したことが, その後の作品集"Opbrud og Ankomster"(『出発と到着』1974), "Ode til Blæksprutter og andre Kærlighedsdigte" (『烏賊への頌歌と愛の歌』1975) に強い影響を及ぼした.

その他の作品に、詩集"Syvsoverne" (1969)"Guds Hus" (1977)"84 digte" (1984) や小説"Finckelsteins blodige bazar" (1983) などがある。

### 解釈

詩の題名である「上陸」とはいったい何を表しているのだろうか、1連目から連想される長い航海、そしてその後にやっとたどり着いた場所、これを作者は自身の心情と重ね合わせ表現している。つまり作者の上陸した場所とは「愛の宣言」とも感じられるような、「言葉」の本当の意味だったのだ。言葉を道具にする詩人として旅を続けながら、目に入ってきた新鮮な物事を次々とその言葉によって表現してきたが、何度もそうしていく内にそれらの意味は曖昧なものになり、生まれたフレーズさえ空虚なものになっていった。「不在」を好む作者の旅は地図を持たない全く自由なものであったのかもしれない。しかし裏を返すとそれは目的のない旅であり、そして現実からの解放は「逃亡」とも表裏一体なのである。そんな迷路に迷い込んでしまったような状況になったある時、ふとした瞬間に再び言葉の意味が輝き出す。長く重苦しい航海の後に美しい浜辺を見た時のように、

2連目に繰り返される言葉への崇拝.これがまさに作者のたどり着いた岸辺であったのだろう.自分が自己表現の手段として操っている「言葉」は人間に使われる、という枠内に収まるものではない. どんな時にも、あらゆる国の人々の間に一定のイメージや意味を持ちながら生き続けているものなのである.土地の名前を例に挙げても、名前(=言葉)のないものは名前を得るまで私達の憧れを継続させ、名前を得た後もそのイメージで以後いつまでも生きつづけて行くのである.

3 連目の「燃える大地」は作者自身の内面を、「仮面」は道具としての言葉を、そして「無関心な死」は生きるための活力を表すのではないだろうか。何か燃えるようなものに心躍らされ、使い込んできたそれ自体は無表情な言葉達の織り成すものに笑いを誘われ、取るに足らない一個人のやがて訪れる死に、そう考えることによる反動で見出される活力のようなものが感じられる。

全体を通してこれは作者の「言葉」への賛歌のように感じられる。そしてまた、どこか高いところから世界をぐるっと見渡すようなそんな広がりを詩全体が持っているようである。

最後に詩の最終行に記されている Lesvos とはギリシャの島の名で、ギリシャ神話において堅琴の名手で巧みな歌い手として知られるオルペウスが葬られ、その後素晴らしい詩人と歌手を輩出したと言われる場所である。そんな土地で Norbrandt も何か感じるものがあったのかもしれない。



近·現代詩分析 2001

	風船乗りの夢	風船乗り 就原朔太郎
		西脇順三郎
	死別の翌日15 憔悴 I13 原中也 膵臓	死 性原 別の の
	(す大東万	\( \)
	きみ	谷川俊太郎
I was born26	ζ6 %太郎 市原裕子	春夜
母24 吉田一穂	うたふやうにゆつくりと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	立 京 た 道
肺炎	大漁4 手島杏子	金子みすゞ
	自分の感受性くらい	茨木の5
ゴキブリ	目次	

自分の感受性くらい

みずから水やりを怠っておいて ぱさぱさに乾いてゆく心を ひとのせいにはするな

友人のせいにはするな 気難しくなってきたのを しなやかさを失ったのはどちらなのか

なにもかも下手だったのはわたくし 近親のせいにはするな 苛立つのを

暮しのせいにはするな 初心消えかかるのを

そもそもが ひよわな志にすぎなかった 駄目なことの一切を

自分の感受性くらい

わずかに光る尊厳の放棄

時代のせいにはするな

自分で守れ

ばかものよ

(『自分の感受性くらい』 一九七七年)

### 茨木のり子 (一九二六~)

時人. 本名三浦のり子. 大阪生まれ. 二十歳で敗戦を迎え, 戯曲やの心に生きた人々』など. おいに生きた人々』など. おいに生きた人々』など. おいに生きた人々』など. おいに生きた人々』など. 大阪生まれ. 二十歳で敗戦を迎え, 戯曲やの心に生きた人々』など.

### 解釈

ほうが適切であろう、そしてそんな戒めの言葉が連ねられていながらめ、既にそういったことはほとんどなかったように思われる。そんな中にあってこの詩は、よその家のおばさんが自分に思われる、そんな中にあってこの詩は、よその家のおばさんが自分に思われる、そんなり、既にそういったことはほとんどなかったように思われる、そんな中にあってとがないという、私自身が子どもの頃のお母さん)に怒られるということがないという、私自身が子どもの頃のお母さん)に怒られるということがないという、私自身が子どもの頃のお母さん)に怒られるということがないという、私自身が子どもの頃のお母さん)に怒られるということがないという、私自身が子どもの頃のお母さん)に怒られるということがないという。

いるということ、このことが,あくまでもこの文章を詩たらしめていも,たとえば「水やりを怠っておいて」などの比喩的表現がなされて

かが光によって照らされた、この詩からはそんな印象を受けた、 
ことでまず頭をがつんと殴られ、そのあと自分が見失いかけていた何に対する説教、いわば観念的な観点からの説教を受けた経験はあまりに対する説教、いわば観念的な観点からの説教を受けた経験はあまりに対する説教、いわば観念的な観点からの説教を受けた経験はあまりを感じさせる詩というのが、私には非常に新鮮なものに映った、読むを感じさせる詩というのが、私には非常に新鮮なものに映った、読むを感じさせる詩というのが、私には非常に新鮮なものに映った、読むを感じさせる詩というのが、私には非常に新鮮なものに映った。読むがが光によって照らされた、この詩からはそんな印象を受けた。 
説教の話に戻るが、私自身子どもの頃両親に怒られるにしても、説教の話に戻るが、私自身子どもの頃両親に怒られるにしても、

この詩が筆者によって深く掘り下げられ、普遍にたどり着いているがある:「いい詩というのこと)にまで届いた詩のことです。」先述したり下げて普遍(ほんとうのこと)にまで届いた詩のことです。」先述したり下げて普遍(ほんとうのこと)にまで届いた詩のことです。」先述したり下げて普遍(ほんとうのこと)にまで届いた詩のことです。」先述したり下げて普遍(ほんとうのこと)にまで届いた詩のことです。」先述したり下げで普遍(ほんとうのこと)にまで届いた詩のことです。」先述したがおれた詩を集めた『ポケット詩集』(一九九八)で初めて読んだ。『ポケット詩集』ではなく、様々な詩人によって掛私はこの詩を、茨木のり子の詩集ではなく、様々な詩人によって掛

ゆえになせる技なのかもしれない

(集者によるとこの詩の種子は戦争中にまでさかのぼるのだという、 をういものを楽しむということが禁じられていた時代、しかし筆者自身、周りの友人たちも含めて美しいものを欲する年頃であった。敵国身、周りの友人たちも含めて美しいものを欲する年頃であった。敵国のジャズを布団の中で聞かなくてはならないことに対する疑問、一位とさに、自分の感受性から間違えたとしたら、取り返しのつかないいやなとさに、自分の感受性から間違えたとしたら、取り返しのつかないいやなとさに、自分の感受性から間違えたとしたら、取り返しのつかないいやなとさに、自分の感受性から間違えたとしたら、取り返しのつかないいやなとさに、自分の感受性から間違えたとしたら、取り返しのつかないいやなとさに、自分の感受性から間違えたとしたら、取り返しのつかないいやなという、一篇の詩ができるまで、何十年もかかるということもある、そう筆者は言う、

ろうか、もちろん詩の中のことば一つ一つからだけでもことばのもつ意味もちろん詩の中のことば一つ一つからだけでもことばのもの中のことば一つ一つからだけでもことばのもつ意味があるが

### 大漁

大漁だ 朝焼小焼だ

大漁だ. 大羽鰮の

浜は祭りの ようだけど

海のなかでは

何万の 鰮のとむらい

するだろう

『日本童謡集』に掲載 一九二六年

# 金子みすゞ(一九〇六~一九三三)

で祭りのようであった. 大正時代,町は猟師たちで栄えており,特に,大羽鰮の時期にはまる 謡作家である、彼女は明治三九年に山口県に生まれた、彼女の育った 金子みすゞ(本名テル)は明治終わりから昭和の頭を生きた女流並

うになった.そして大正十二年六月の始め,金子みすゞというペンネ た童話を投稿した.この作品はこの年の九月号に全て載った.童謡作 ームで雑誌「童話」「婦人クラブ」「婦人画報」「金の星」に,初めて書い テルは叔母の嫁ぎ先だった上山文英堂で働きながら童謡を書くよ

家金子みすゞの誕生である. 金子みすゞは、その後もさらに活躍を続けたが、彼女にとっての幸

せな時代はそう長くは続かなかった

のだ、そして、童謡を書くことも文通をすることも禁じられてしまっ な色を濃く出したもので,しかも夫とはなかなかうまくいかなかった たのである みすゞは大正十五年二月に結婚した.しかしその結婚は政略結婚的

行くといってきたのである.当時の法制度の上では,テルは娘を夫に を返せと何度も言うようになった、そしてついに、三月十日に迎えに いと言い,夫はこれを受け入れた.しかし気持ちをひるがえして,娘 渡さなければならなかった。 そして,昭和五年二月,離婚.離婚の条件としてテルは娘を育てた

は,「今夜の月のように私の心も静かです」と書いてあった.享年二三月九日,テルは三通の遺書を残し,薬を飲んで自殺した.遺書に

八歳であった.

じることができる.

痛みを想像出来るからこそ彼女の詩はやさしい,ということではない言い換えるならば,あらゆる命というものははかないもので,その

であろうか.

いるものも,そうではないものも.これは原始的な宗教,あるいは子みすゞの詩において,あらゆるものには生命が宿っている.生きて

解釈

とが、私はただ単純にすごいと思うのである. というのはみすゞの詩が大好きである. 彼女の詩を読むと、とても静かな供の心においてよく見られるものである. そのようにはなかなか言えるものではないであろう. そそうである. そのようにはなかなか言えば、盛大な大羽鰮の漁の陰で、ちである. 何えばこの作品において言えば、盛大な大羽鰮の漁の陰で、ちである. そのようにはなかなか言えるものではないであろう. そそうである. そのようにはなかなか言えるものである. というのはみすゞの気持ちになり想像力が描き立てられるのである. というのはみすゞの失いの心においてよく見られるものであり、アニミズムという.

ないが,彼女の詩から,動物だとか魚とか花だとか,そして人間だと詩の壮大さである.つまりはアニミズムの考え方に繋がるのかもしれ

そしてもう一つ金子みすゞのすばらしさを感じるところは彼女の

か、そういう小さなことではなくてこの世界にある命というものを感

5

### 萩原 朔太郎

## うたふやうにゆつくりと……

日なたには いつものやうに しづかな影が こまかい模様を編んでゐた。淡く しかしはつきりと

花びらと 枝と 梢と――何もかも……

すべては そして かなしげに うつら うつらしてゐた

私は待ちうけてゐた 一心に 私は 見つめてゐた 山の向うの また 山の向うの空をみたしてゐるきらきらする青を

ながされて行く浮雲を 煙を……

古い小川はまたうたつてゐた 小鳥も たのしくさへづつてゐた きく人もゐないのに

風と風とはささやきかはしてゐた かすかな言葉を

見つめてゐた―――風と 影とを…… (『優しき歌Ⅰ』より)

ああ 待ちうけてゐた 私の日々を優しくするひとを 不思議な四月よ! 私は 心もはりさけるほど

春夜

蛤のやうなもの、 浅蜊のやうなもの,

みぢんこのやうなもの、

それら生物の身体は砂にうもれ、

どこからともなく、

絹いとのやうな手が無数に生え、

手のほそい毛が浪のまにまにうごいてゐる。

あはれこの生あたたかい春の夜に、

そよそよと潮みづながれ、

生物の上にみづながれ、

貝るゐの舌も、ちらちらとしてもえ哀しげなるに、

とほく渚の方を見わたせば、

ぬれた渚路には、

腰から下のない病人の列があるいてゐる,

ふらりふらりと歩いてゐる.

ああ、それら人間の髪の毛にも、

審の夜のかすみいちめんにふかくかけ,

よせくる, よせくる, このしろき浪の列はさざなみです.

(『月に吠える』より)

## 立原道造(一九一四~一九三九)

白秋の短歌を好み,一髙入学後,前田夕暮の「詩歌」に自由律短歌を 一九一四年,東京都に生まれる.府立三中時代から石川啄木や北原

### 発表する.

の創刊に参加する.夏には信州追分に滞在. 第一詩集『わすれ草に寄す』、次いで『暁と夕の詩』を刊行する、な お,卒業設計は年度最優秀賞を三年連続して得る.このころ,肋膜炎 の静養中,追分の旅館油屋が消失し,九死に一生を得る. 一九三四年,東大に入学,同人誌「戯画」を創刊.次いで「四季」 一九三八年,営業を再開した追分油屋滞在中,詩集『優しき歌』の | 九三七年,東大を卒業し,石本建築事務所に就職する.この年,

巡るが、長崎で喀血し倒れ、帰郷して入院する、翌年、中原中也賞を 構想がまとまる。心身改善の旅を計画し、東北、関西、山陰、九州を 受賞したが、その直後にわずか二四歳八ヵ月で生涯を終える。

# 萩原朔太郎(一八八六~一九四二)

覚め,「文庫」「明星」などに短歌を投稿する.中学卒業後,五校,六 一八八六年,群馬県前橋市に生まれる.前橋中学在学中に文学に目

音楽,特にマンドリンに熱中する 慶応大に入学したが,どれも長続きしない.二五歳ごろから西洋

ガゞ, 詩誌「感情」を創刊し,新風を送りながら,独自の詩境を開拓したの 壇に出る.その頃,その著作に感激して生涯の友となった室生犀星と 九一三年,白秋主宰の「朱欒(ザンボア)」に詩が掲載され, 第一詩集『月に吠える』である 詩

得る. 一九二三年,新風の詩をまとめて『青猫』を刊行し, 「日本口語詩の真の完成者」とも言われる. 不動の評価を

心に,「四季」同人と活発な文学活動をするが,一九四二年,五五歳 再婚などを経験する.『氷島』以後は,『日本への回帰』など評論を中 九二五年,上京し,多くの文人と交際する.その間離婚,父の死, 病のためこの世を去る

### 解釈

れた絵画である。そして同時に、心の目で見た絵画である。ちょうど 画家の心の目に映る風景が,その色使いや画風に表現される時のよう 詩人が,その目に映る風景を詠う時,それは言葉という手段で描か そこには作家の心の風景が繊細に映し出される

して描かれた『うたうようにゆっくりと・・・』には, 春のやわらかな日差しに包まれた暖かな風景が、著者の心の目を介 かすかに虚しさ

> 麗しいはずの情景を,どこか物憂げにさせている.荖者である立原道 造は、よく花鳥風月を詠う詩人である、それはどれも、はかなく、淡 が漂う、著者の心に沸き起こる寂しさ、温もりを求める心の隙間が、 で風景を描くように詩を詠んだと思わせるその描写は、『うたうよう い色彩で彩られた水彩画を見ているような印象を与える.水彩絵の具 にゆっくりと・・・』では,春の愁いを効果的に表現している。

そして幻の世界を描いた『春夜』、想像の世界の中で見る小さな生物 の夜に,それら生物の,浪に翻弄され,哀しげに微動するあり様を詠 の営みは、 異質の, かに翻弄されつつも微動し,そして宛てのない自分の心を見たのだろ 春の夜の浜辺で,そこに息づいているであろう生物,波打つ潮 遠く離れた渚には宛てのない亡霊達の姿を見る著者はまさに,何 抽象的絵画ではないだろうか 幻想の世界が暗闇の中にぼんやり白く浮かび上がる、無彩色 生命感と同時に,どこか哀愁をも感じさせる.生暖かい春 著者の心の目に映る風景とは、 立原道造のそれとは全く 水

う.

きみ

きみはもうじぶんのことしかかんがえていないめで どんなにうれしいだろう ねむってるのではなくてしんでるのだったら きみはぼくのとなりでねむっている しゃつがめくれておへそがみえている じっとぼくをみつめることもないし ぼくのきらいなあべといっしょに ぼくはむねがどきどきしてくる きみがそばへくるときみのにおいがして かわへおよぎにいくこともないのだ ふたりっきりでせんそうにいった がっこうのこともわすれていた おかあさんのこともおとうさんのことも ゆうべゆめのなかでぼくときみは ふたりとももうしぬのだとおもった きみとともだちになんかなりたくない しんだきみといつまでもいきようとおもった

ぼくはただきみがすきなだけだ

(「はだか」一九八八年)

# 谷川 俊太郎 (一九三一~)

きみに話しかけたかった」. で広げている、主な作品「六十二のソネット」「夜中に台所でぼくはい場域と宇宙的想像力に基づく孤独感とを情新に表現した。彼は詩の生命感と宇宙的想像力に基づく孤独感とを情新に表現した。彼は詩が掲載され,そして昭和二七年,「二十億光年の孤独」を出版、青春まれる、昭和二五年,雑誌「文学界」に三好達治の紹介文付きで作品東京都出身、哲学者の父、哲三とピアニストの母、多喜子の間に生

#### 解釈

が,私には衝撃的だった.
だのだが,その次に来る「どんなにうれしいだろう」というフレーズえている.そして授業で取り上げるにあたり,詩集をあらためて読んでるのだったら」という流れが,あまりに極端で印象的だったのを覚ている」→「おへそがみえている」→「ねむってるのではなくてしんって流れる歌詞を耳で聞き取っていたのだが,三行目までの「ねむっ私はこの詩を,「合唱」を通してはじめて知った.メロディーに乗

全体を通してひらがなで書かれているのが、この詩の一つの特徴で

もある作品である.一見やさしい印象を受けるものの、読み終えた後に、何かこう、ある.一見やさしい印象を受けるものの、読み終えた後に、何かこう、ある.一見やさしい印象を受けるものの、読み終えた後に、何かこう、

10

## くりかえす

しにいつか夜のくるこのくりかえしよりかえしてこんなにくりかえしむかえしにくりかえしてくりかえしてりかえしてりかえしてりかえしのだけがくりかえし残るくりかえは死んでくりかえするのだけがくりかえし残るくりかえしていのでりかえしのくりかえしだらりかえしていりかえしていりかえしていりかえしていいのかくりかえしていりかえしているにこんなにくりかえしないとりかえしくりかえしているりかえしているのだけがくりかえしないとりかえしているりかえしているにいつか夜のくるこのくりかえしとりかえしているりかえしているいえしているというないできませんがある。

云うな云うなさよならとは!

別れの幸せは誰のものでもない

私たちはくりかえす他はないくりかえしくりかえし夢み

あいくりかえし抱きあつてくりかえしくるよだれよ

もう会えないことをくりかえし

いつまでも会うくりかえし会わないくりかえしの樹々に

風は吹き

なんとおまえは遠いのだおお明日よ明日よの絶えない咳と鍋に水を汲む音

(詩集『あなたに』 一九六〇年)

## 谷川 俊太郎 (一九三一~)

幅広い領域で活躍している. 現在ラジオドラマ、劇作、作詞、絵本など的であり、活動的である. 現在ラジオドラマ、劇作、作詞、絵本などものであり、活動的である. 現在ラジオドラマ、劇作、作詞、絵本などを可流 (一九五三年創刊、大岡信らが参加)に参加する. その後詩集れたみずみずしい感性で健康的に、そして明るく平易な傾向を持つ詩に一般。(一九五三年創刊、大岡信らが参加)に参加する. その後詩集れたみずみずしい感性で健康的に、そして明るく平易な傾向を持つ詩のであり、活動的である. 現在ラジオドラマ、劇作、作詞、絵本などので「ネロ」他5編の詩を発表、一九五二年には最初の詩集『二十億光年の孤独』を発表し新しい叙情詩の出現といわれた。戦争から解放さずる、宇宙的なものへ、社会的なものへ、その作品の主題は常に前進する。 中間は、一般のである。 現在ラジオドラマ、劇作、作詞、絵本などので活躍している。 中間は、一般のでは、一般では、一般のでは、一

## 解釈

を与えて「くりかえす」ことが強調されている.とうないはいいまでも洗くような印象連想させるようである.しかしそうすることで詩がスピードを得,そ言葉の途中でも改行されているところはまるでノートの殴り書きを言葉の途中でも改行されているところはまるでノートの殴り書きを引かれる部分の一つである.切りのいい所で行を変えるのではなく,でいれる部分の一つである.切りのいい所で行を変えるのではなく,のである.そして前半に見られる改行の仕方もまた,読む時に目をを与えて「くりかえす」といった言葉の繰り返しが印象的「くりかえして」「くりかえす」といった言葉の繰り返しが印象的

と言える.「陽はのぼり沈み」,「くりかえし米を煮て」そして「鍋に水 うであるが,しかしそれは逆に繰り返すことで得る安心を表している れた二行は一見この「くりかえし」に疲れ,絶望を感じているかのよ ろうか.最後の「おお明日よ明日よ/なんとおまえは遠いのだ」と書か ことは、明日があることの保証であり、その点での不安は感じられな を汲む音」といった日常のひとこまが果てしなく繰り返されるという ろのまるでない一種幾何学的な潸潔さ、無駄のなさ」といった特徴が ば「もう会えないこと」もまた繰り返されるからである.明日が遠いと りすぎたような勢いのある詩である。 あるという、まさにその特徴を持った詩だと言えよう、風がさっと通 る.大岡信によると谷川の詩には「じめじめしたところ感傷的なとこ 返すものなのだ」という一歩引いた視点からの素直な感想のようであ ると言うわけでもない、なぜなら何かと「会う」ことを繰り返しもすれ い.またそういった繰り返しから成る生活に,作者は飽き飽きしてい いう表現もそのことに対する絶望ではなく,「物事はこのように繰り この終わりのない「くりかえし」の中に作者は何を感じていたのだ

## 中原 中也

憔悴 Ⅱ

恋愛詩なぞ愚劣なものだと 番 私は思つていたものだつた

甲斐あることに思ふのだ今私は恋愛詩を詠み

恋愛詩よりもまともな詩境にはいりたいだが今でもともすると

とにかくさういふ心が残つてをりその心が間違つてゐるかゐないか知らないが

とんだ希望を起させるそれは時々私をいらだて

恋愛詩など愚劣なものだと昔私は思つてゐたものだった

ゆめみるほかに能がないけれどもいまでは恋愛を

(山羊の歌)

# 中原(中也(一九〇七~一九三七)

よく採られている,現在では近代詩の古典となっている.逝.その死後(在りし日の歌が出版された.中学や高校の教科書のもの歌」を自費出版.わずか三〇年の生涯であり,一九三七年鎌倉で急で友人との共同詩集(末黒野)を発表.一九三四年に第一詩集「山羊山口県生れ.東京外語専修科修了.若くして詩才を顕わし,十五歳

させられる

悩に対するあきらめと恋愛詩を詠むことにたいする開き直りも感じであり、対して六連目に息もつかず「昔私は.・・」と詠むところは苦のあとの空白は、深いため息を思わせる。それこそが、苦悩そのもの私は思つてゐたものだった」と言う部分である、一連目における「昔」いては「昔」私は思つてゐたものだった」であるのに、第六連では「昔

#### 解釈

中原中也の詩には人間としての苦悩のみ残り、再び恋愛をゆめっているとも断言はできず、ただその苦悩のみ残り、再び恋愛をゆめた。 ではないだろうか。しかし恋愛詩を詠むということは、彼に恋愛詩から離れることが出来ないという苦悩が映し出されているのではないだろうか。しかし恋愛詩を詠むという苦悩が映し出されているのではないだろうか。しかし恋愛詩を詠むという苦悩が映し出されているのではないだろうか。しかし恋愛詩を詠むという苦悩が映し出されているのではないできる。例えば、この「憔悴 II」においては中也の偉大な詩中原中也の詩には人間としての苦悩、また中也自身の苦悩を感じる

この詩においてもう一つ心をうごかされるのは、第一連の一行目にお

## 死別の翌日

最初から独りであつたもののやうに死んでゆく. 親を離れ,兄弟を離れ、 物云いたげな瞳を床にさまよはすだけで, 死にゆくものはその清純さを漂はせ 生きのこるものはづうづうしく,

さて、今日はよいお天気です. 街の片側は翳り,片側は日射しをうけて, けざやかにもわびしい秋の午前です それは海の方まで続いてゐることが分かります. 空は昨日までの雨に拭はれて、すがすがしく、 あつたかい

さりとて死んでいつたもののことも考へてはゐないのです. 歩いてゆく私はもはや此の世のことことを考へず、 その空をみながら、また街の中をみながら みたばかりの死に茫然として,

阜怯にも似た感情を抱いて私は歩いてゐたと告白せねばなりません. (未刊詩篇)

だからこそ人間一般に対する苦悩と受けとることができる この詩の中の苦悩は,誰かの死別により,引き裂かれたはずの心が翌 るもの,親,兄弟,恋人,友人の死もまた平等に訪れるものであり, 日) には人間の苦悩を感じる。死は万人に対し平等に訪れ、また愛す もはやその死別のことすら忘れて、街や空の素晴らしさに目を奪われ 日,けざやかな(はっきりとした,澄んでいる)秋の朝に包まれて. てしまう、昨日は、悲しみの中にあったのにである、これはづうづう 見るだとか,空を見るだとかいった行為により死んでいったもののこ 死に茫然としながらも,一方で「私は」生きている実感,例えば街を しく生き残った自分に対する罪悪感に対する苦悩ではないだろうか とをわすれてしまっているのである. 「憔悴 Ⅱ」が中也自身の苦悩であったのに対して、この(死別の翌

だからこそ二つの世界,つまり生の世界と死の世界を存在させたので というところや、昨日までは雨であったこと、しかし今日はすがすが やないだろうか.それは「街の片側は翳り,片側は日射しをうけて:」 り一層生き残ったものの罪悪感のような苦悩を感じるのである て,二連目以降は生きている自分が語っていることである.そこによ しい朝であること,そして第一連のみを死そのものを書いたのに対し

ন্য

私の舌をぬらした.
一次がよの羽と黄金の毛をぬらした,一次がよの羽と黄金の毛をぬらした,一次がよの羽と黄金の毛をぬらした,一次がよの羽と黄金の毛をぬらした,一点をぬらした,一点をぬらした。

(「Ambarvalia」 一九三三年)

# 西脇 順三郎 (一八九四~一九八二)

と同じく,モダニズムの代表的作品である。「Ambarvalia(あむばるわりあ)」は,同時期の三好遠治の「測量船」日本におけるモダニズム文学運動に大きな影響を与えた。彼の詩集新しい詩の形態が生み出された。西脇順三郎はその中心的存在となり、昭和三年頃から,旧詩壇とプロレタリア詩派に抵抗する運動が興り、昭和三年頃から,旧詩壇とプロレタリア詩派に抵抗する運動が興り、新潟県生まれ、萩原朔太郎の詩集「月に吠える」に感動し、渡英し

## 解釈

かしい印象を,詩全体を通して感じられる.
て,人々は降ってくる雨の下で生活を営んでいる様子がイメージできて,人々は降ってくる雨の下で生活を営んでいる様子がイメージできしとしととやさしく降り注いでいるような雨.場所は地中海周辺,ギしとしとにない.天気雨のような,空は太陽がさんさんと照っていて,同じ「雨」でも,この詩の中で描かれている雨は,ざあざあ降って同じ「雨」でも,この詩の中で描かれている雨は,ざあざあ降って

## 風船乗りの夢

夏草のしげる叢から

ふはりふはりと天上さして昇りゆく風船よ

龍には舊暦の暦をのせ

はるか地球の子午線を越えて吹かれ行かうよ

ばうばうとした虚無の中を

雲はさびしげにながれて行き

草地も見えず 記憶の時計もぜんまいがとまつてしまつた.

どこをめあてに翔けるのだらう

さうして酒瓶の底は空しくなり

酔ひどれの見る美麗な幻覺も消えてしまつた。

しだいに下界の陸地をはなれ

愁ひや雲やに吹きながされて

知覺もおよばぬ眞空圏内へまぎれ行かうよ

この瓦斯體もてふくらんだ氣球のやうに

ふしぎにさびしい宇宙のはてを

友だちもなく、ふはりふはりと昇つて行かうよう

(『定本・青猫』に掲載)

## 萩原 朔太郎 (一八八六~一九四二)

高校を転々としたが,結局中退し,西洋音楽(特にマンドリン)に熱 ら文学に関心を持ち,交友会誌「坂東太郎」に作品を発表.卒業後, 群馬県前橋市に開業医の長男として生まれる.前橋中学在学時代か

ジと言葉のリズムで表現し、口語自由詩の真の完成者として特策され 独・倦怠・病める魂・厭世観など近代人の思想と感情を新しいイメー を受け、自らも韻律にこだわらない口語体の詩を作りはじめた、孤 詩運動以来続いた先入観を打ち砕いた室生犀星の『小景異情』に感銘 人として出発する.流艇な韻文でなければならないという明治の新体 一九一三年,北原白秋主宰の「朱欒(ザンボア)」に詩を発表,詩

代表作に『月に吠える』『青猫』『純情小曲集』『氷島』など.

## 解釈

れ行"く自分とは、"どこをめあてに翔ける"でもなく、ただ虚無的 かる. その気球に乗って"宇宙のはて"まで"吹きながされ"、まぎ ここで言う。風船。とは、読み進めていくと気球のことであると分

つて行"く"風船"に例えたのである.な地に足のついていない人生を,筆者は,空中を"ふはりふはりと昇に目的もなく生きている自身のことを表しているのだろう.そのよう

一方で、。 風船、という象徴や、風船乗りの夢、という題名は、読満ちたものである、お酒で気分を紛らすことしかできない。 た、真空圏内、や、宇宙のはて、という果てしなく大子午線を越え、た、真空圏内、や、宇宙のはて、という果てしなく大小ささ、空しさといったものを一層強調している。 地球の小ささ、空しさといったものを一層強調している。 しかしそのような人生は、"さびしげ"であり"空しく"、愛い"にしかしそのような人生は、"さびしげ"であり、空しく、"愛い"に

に、視覚的にも聴覚的にも相反する印象と響きを筆者は持たせている。ってもたらされる印象は堅くごわごわしている。こうして同じ詩の中う言葉がもたらす柔らかな余韻と相反して、旧仮名遣いや異体字により、や"ばうばう"といった擬態語、何度も繰り返される"よ"といることで、詩の題材とテーマによる相反する印象を植え付けている。む者に大変ロマンティックな印象を与えるものとなっている、こうすむ者に大変ロマンティックな印象を与えるものとなっている、こうすった。。

## ゴキブリ

だれが いちいち書いたのか あの小さなゴキブリの背中に 「殺せ!」などと

「殺せ!」ばかりが出てきてゴキブリは いなくなった 世界中に

ひにち毎日 さいそくする

なにがなんでも私たちを 「殺し屋」に

してしまわなくてはすまないかのように

殺せ!

殺せ!

殺せ!と

ーうさぎでございます

というように

うさぎの ほうが

きちんと すわるものだから

そらの ほうも

のはらの ほうも

きちんとして むかえているよ

ーこれは これは

うさぎさんですか…と

(まど・みちお少年詩集『しゃっくりうた』より)

まど・みちお(一九〇九~)

汚した ちょうほんにんの 出て下さるはずなど ないのだった はんとうは

自分たちの空を 見あげながらいぶかしげに こんなに汚れたのだろうとなんちょう なんおく 暮している はんちょう なんおく なんている

でもここは

人間だけしか住んでいないのだったら

(『ポケット詩集Ⅱ』より) あんなにひっそりと きょうも 生は 出てくださっているのだ は 出てくださっているのだ の少しでも くもらせたくないために その あどけない目を

があり、童謡集に『ぞうさん』『まど・みちお童謡集』がある.しき』『まど・みちお詩集全六巻』『風景詩集』『つけもののおもし』を書き続ける.詩集に『てんぷらぴりぴり』『まめつぶうた』『いいけ本名,石田道雄.一九〇九年山口県に生まれる.戦前から詩・童謡

#### 解釈

も、ユーモアという名の命が吹き込まれたかのように、中で息づいている。匂い、音、そして単なる言葉、といったものまでの個性と、存在感とを放ちつつ、詩の主人公たちは、それぞれの詩のでしまった姿ではなくなる。「まど・みちお」によって与えられたそ詩人「まど・みちお」の目にとまると、それらはもはや私達の見慣れ普段何気なく目にする風景や物、そして動物。このようなものが、

いる『ゴキブリ』にさえも,同情,哀れみに似た感情を詩に託し、私底知れぬ愛情を窺い知ることができる.あれほど皆に疎ましがられてると思われるほどに,そのあらゆる詩によって,彼の生き物に対するる.命を宿すものはすべて,彼の目には尊く,そして愛しく映ってい「まど・みちお」の詩の中でとりわけ多く登場するのが生き物であ

である.

走に『ゴキブリ』も尊い生き物であることを思い出させてくれる.このように、それぞれの生き物が宿す生命を重んじるだけでなく、『うのように、それぞれの生き物が宿す生命を重んじるだけでなく、『うのように、それぞれの生き物が宿す生命を重んじるだけでなく、『うのようである. 詩の中で人間という存在はあくまで脇役である. ここに作者の表現の巧みさが証明されている. 『虹』という詩では、その背後で人間中心の世の中が皮肉られている. 『虹』という詩では、その背後で人間中心の世の中が皮肉られている. 「虹』という詩では、その背後で人間中心の世の中が皮肉られている. 「虹』という詩では、その背後で人間中心の世の中が皮肉られている. 「虹」という詩では、その背後で人間中心の世の中が皮肉られている. 「ゴキブリ』も尊い生き物であることを思い出させてくれる. こ 造に『ゴキブリ』も尊い生き物であることを思い出させてくれる. こ

ユーモアある視点を持って接することの大切さを教えてくれる詩人で、それによってできた詩はどれも独自な言葉の集合体を形成し、まって『少年詩集』たり得ていると言える、勿論大人は大人で、そのまって『少年詩集』たり得ていると言える、勿論大人は大人で、そのまって『少年詩集』たり得ていると言える、勿論大人は大人で、その世界に「まど・みちお」は言葉という要素を心から楽しんでいる詩人であったが、みちお」は言葉という要素を心から楽しんでいる詩人であったが、よって『まど・みちお』は言葉という要素を心から楽しんでいる詩人であった。

### 肺炎

で変す。いまごろそんな にの養ぐらい巨きな室が にの養ぐらい巨きな室が にの養ぐらい巨きな室が にないのでありかもなにもわからない をうそんなものみんなおれではないらしい たがまあ辛くもかう思ふのがおれなだけ なにを! 思ふのは思ふだけ なにを! 思ふのは思ふだけ なにを! 思ふのは思ふだけ なにを! 思ふのは思ふだけ

(宮沢賢治詩集 補遺詩篇より)

# 宮沢賢治(一八九六~一九三三)

悪化し,最期の五年間は病床で創作活動を行った.農民の生活の向上を願い粉骨砕身努力したが実らず,過労で肺結核がを卒業.大正十年から五年間,花巻能学校で教鞭をとっていた.彼は宮沢賢治は明治二九年,岩手県花巻に生まれた.盛岡高等農林学校

## 日蓮宗徒:

た「風の又三郎」「銀河鉄道の夜」などの童話はあまりに有名である.彼の詩「雨ニモマケズ」は小学生の教科書に載るなどしており,ま

#### 新

る。 いとまで感じるほどの苦しみが彼から搾り出ているような感を受けわってきたからである。特に後半「手足は…」からは自分が自分でなの詩を読んだ時に,賢治の病床の苦しみややるせなさが痛いほどに伝表作であるが,今回私は「肺炎」という詩に注目した。というのはこる。

そして言葉の使い方である.宮沢賢治は擬音語,擬態語の使い方が非そしてもう一つこの詩に惹かれたところがある.それは音の響き.

常に上手である。例えば「風の又三郎」において、賢治は風を「どっどどうど どどうど どどうと と表現しているために一目で肺の異常がわかる、小学校の教師ら言い回を使っているために一目で肺の異常がわかる、小学校の教師ら言い回を使っているために一目で肺の異常がわかる、小学校の教師らずぶつぶつ会議を続ける、という表現も皮肉っぽいがわかりやすいたりと書くらしい、何気なく簡単に使う言葉にも意味を込めることが出来て、そして読む人を自分の肺の様子を「ぽむぷはぽむぷでがたびし」と書くらしい、何気なく簡単に使う言葉にも意味を込めることが出来て、そして読む人を自分の世界に惹きつける言葉を知っている賢出来て、そして読む人を自分の世界にあきつける言葉を知っている賢出来て、そして読む人を自分の世界にあきつける言葉を知っている賢出来て、そして読む人を自分の世界にあらいることが出来るようと、実は「話しているのだが、これを見ば、どどうど

母

あゝ麗しい距離

つねに遠のいてゆく風景・・・・・

悲しみの彼方、母への、

搜り打つ夜半の最弱音

(詩集『海の聖母』 冒頭の詩)

## 吉田 一穂(一八九八~一九七三)

あった.彼の最初の作品は「海の人形」(大正一三年)であり,昭和四七 年に随想集「桃花村」を出し、昭和四八年に七四歳で亡くなるまで多く でを生きた詩人である.また彼は多くの童話や絵本を残した作家でも の作品を出版した. 吉田一穂(いっすい)は明治三一年に北海道上磯郡に生まれ、昭和ま

彼の第一詩集は「海の聖母」(大正十五年)といい、これは北原白秋の

賞賛を受けた.

「イデエとしての詩」を考える、独特な詩人であった、

#### 解釈

感心してしまう. 距離を麗しいというところなどは,言われると本当にそうだなあ,と っと押し寄せてくるような印象を受ける.表現もきれいで,故里との て母を思い出させられるのである.それもぎゅっと詰まってそれがど 四行というとても短い詩であるにもかかわらず,強烈に故郷,そし この詩は第一詩集「海の聖母」の冒頭を飾った詩である。 まだまだ年を重ねなければ本当に分かったとは言えないかもしれ

まっていっつけてったがまた,女郎と切なく思う気持らは変わらな人間らしい詩だなあ,と思った.それと同時に,私は勝手にとてもす,そして少し切なさも伴う詩である.特に母への思いがピアニッシないが,家から離れ一人暮らしをする私には,この詩は故郷を思い出

いのであろう.これまでも,これからも.きっといつの時代も子が母を,故郷を切なく思う気持ちは変わらな

SISM

確か 英語を習い始めて間もない頃だ

りと ら浮き出るように 白い女がこちらへやってくる 物憂げに 或る夏の宵.父と一緒に寺の境内を歩いてゆくと 青い夕靄の奥か ゆつく

離さなかった.頭を下にした胎児の 女は身重らしかった、父に気兼ねをしながらも僕は女の腹から目を それがやがて 世に生まれ出ることの不思議に打たれて 柔軟なうごめきを 腹のあたり

女はゆき過ぎた

話しかけた. 少年の思いは飛躍しやすい.その時 まさしく〈受身〉である訳を ふと諒解した、僕は興奮して父に 僕は〈生まれる〉ということ

-やっぱり I was born なんだね――

父は怪訝そうに僕の顔をのぞきこんだ.僕は繰り返した.

るんだ.自分の意志ではないんだね―― −I was born さ.受身形だよ.正しく言うと人間は生まれさせられ

無邪気として父の眼にうつり得たか.それを察するには その時 どんな驚きで父は息子の言葉を聞いたか、僕の表情が単に 僕はまだ余

りに幼なかった、僕にとってこの事は文法上の単純な発見に過ぎなか

気になった頃があってね―― れなら一体 ―蜉蝣という虫はね、生まれてから二、三日で死ぬそうなんだがそ父は無言で暫く歩いた後 思いがけない話をした. 何の為に世の中へ出てくるのかと そんな事がひどく

僕は父を見た. 父は続けた.

うに見えるのだ.つめたい光の粒々だったね.私が友人の方を振り向 通りなんだ.ところが、卵だけは腹の中にぎっしり充満していて、ほ 鏡で見せてくれた. 説明によると 口は全く退化して食物を摂るに適 み落としてすぐに死なれたのは----とがあってから間もなくのことだったんだよ、お母さんがおまえを生 り返される生き死にの悲しみが っそりした胸の方にまで及んでいる.それはまるで、目まぐるしく繰 しない.胃の腑を開いても、入っているのは空気ばかり.見るとその いて〈卵〉というと(彼も肯いて答えた.〈せつなげだね〉.そんなこ -友人にその話をしたら 或日 咽喉もとまで こみあげているよ これが蜉蝣の雌だといって拡大

うに切なく 僕の脳裡に灼きついたものがあった. ---ほっそりした母の 父の話のそれからあとは、もう覚えていない、ただひとつ痛みのよ 胸の方まで 息苦しくふさいでいた白い僕

の肉体——.

## 吉野 弘(一九二六~)

への通路」などがある. 
「切・方法」「感傷旅行」など、評論集に「詩うになる. 
詩集に「消息」「幻・方法」「感傷旅行」など、評論集に「詩三年間の療養を余儀なくさせられたが、その頃から詩を書き始めるより―のコピーライタ―になる. 
過労のために肺結核を起こしてしまいを迎える. 
その後二十年近くはサラリーマン生活を送り、退職後にフを迎える. 
その後二十年近くはサラリーマン生活を送り、退職後にフを迎える. 
大正十五年に山形県酒田市に生まれた. 
詩人. 
海軍入隊直前に終戦

「感傷旅行」では読売文学賞を受賞している.

### 解釈

あり、哀しみである.
のるいは人のやさしさである.逆に影とはそこから染み出る不条理であるいは人のやさしさである.逆に影とはそこから染み出る不条理でく影がある.彼の描く世界とは,あるいは人間の生そのものであり,を込むような書き方である.しかしながら彼の描く世界の多くは切なるの作品は文体がとてもやさしい.そして想像の世界へと読者を引

born」はまさしく生の不条理を描いているのである。女のやさしさとそれに伴うやるせなさを描いており,この「I was例えばやさしい女の子の電車でのやりとりを描いた「夕焼け」は少

げている」感じであると言った.そして〈せつなげだね〉と言った.まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが「咽喉とまで」こみあ「蜉蝣の雌は卵をお腹の中にぎっしりと詰めていた.それを彼は「目

ば考えるほど,ただ生の切なさを感じるのみである.れでも生を選ぶ人間とは何なのか.この詩を読めば読むほど,考えれけていく生とは何なのか.そうしてまで生を守る必要があるのか.そいものである.自分の命を失ってまで,そんな犠牲を払ってまで,続蜉蝣は次の命へとつなぐために自分の命をかけたのだ.命とははかな蜉蝣は次の命へとつなぐために自分の命をかけたのだ.命とははかな